レクチャーパフォーマンス制作とその翻訳に向けて：崔承喜をめぐるダンスとことば

ダンサー・コレオグラファー崔承喜（1911－1969）を題材とするレクチャーパフォーマンス制作のため、日本とフランスでリサーチを行う。研究方法は、大きく三つに分かれる 。

1.　日本におけるレクチャーパフォーマンスについてのリサーチ

フランスでレクチャーパフォーマンスは、詩人が観客の前で詩の朗読をするポエトリーリーディング(Bernard Heidsieck, Charles Pennequin...）をはじめ、現代アートの文脈における美術館でのパフォーマンス（Esther Ferrer, Violaine Lochu...）、劇場におけるダンスと演劇の間のような作品（Fanny de Chaillé, Jérôme Bel, Tiago Rodrigues…）など、様々な形で発展してきている。舞台芸術のそれぞれのジャンルを超える、新しい創造の形式となる可能性を持っているといえよう。ただし、私は今までフランスを中心に、現代アートの分野で活動しており、日本の事情にあまり詳しくはない。なので今回のリサーチではまず、日本で舞台芸術活動に関わる人々（ダンサー/アーティスト/技術者/専門家など）と出会い、日本におけるレクチャーパフォーマンスの状況と、翻訳の問題について聞き取り・意見交換を行いたい。

翻訳の問題として、例えば、日本語の作品を字幕を使用し海外上演する際、字幕を追っていると、ダンスが見えなくなり、ダンスを見ていると字幕を見忘れてしまうことがあげられる（ex.チェルフィッチュ/三月の五日間のパリ上演時）。また、作家性の強いレクチャーパフォーマンスにおいては、違う俳優により吹き替えを行うのは難しい。現に、フランス人作家Fanny de Chaillé に聞き取りをしたところ、「自分の作品の翻訳はしない」とのことであった。こうした課題をどう解決できるかも考えたい。よって、リサーチでは、劇場で言葉とダンスを使用しているものに、特に焦点を当てる。ここでいうダンスには、いわゆる古典的なダンスの文法に入らない動作も含む。

2. ワークショップ（京都で実施予定）

ことばとダンスがどう協働できるか、具体的に実験できるエクササイズを考案する。希望者と、小規模なワークショップ形式で時間と場所を共有し、編み出した方法を実践したい。それぞれのエクササイズはアーカイブされ、オンラインで公開予定。

3. 崔承喜に関連する「ことば」と「ダンス」の収集

上記の研究と並行し、崔承喜を題材としたレクチャーパフォーマンス制作のための資料収集・インタビューを行う。
崔承喜に興味を持ったのは、今年制作した作品 Répète （リピート）のためのリサーチがきっかけだ。このビデオ作品では、在日コリアンの朝鮮舞踊を取り扱っているが、ある時このダンスは一体どこから来たのだろうという疑問がわいた。調べると、崔承喜が書いた「朝鮮民族舞踊基本動作」という本に書かれていることが元になったようである。
崔承喜は1911年にソウルで生まれ、石井漠のもとでモダンダンスを学んだ。アジア、アメリカやヨーロッパ各地で公演を行った後、北朝鮮で朝鮮舞踊を発展させる。石井漠、イサドラ・ダンカン、マリー・ヴィグマン、マーサ・グラハムなど世界各地に散らばるダンサーとの関連が見られること、研究ではこの多様性に着目したい。

また、日本と朝鮮（後に韓国と北朝鮮）の間を揺れ動くようであった彼女のアイデンティティのあり方にも興味を持っている。現在「在日コリアンの朝鮮舞踊」というと日本社会と切り離された近寄りがたいものに思えるかもしれないが、レクチャーパフォーマンスを通じ、個々のナショナリズムに回収されない、複数の異なるものを柔らかく受け止めるような見方を提示できればと思う。日本でこの作品を制作・発表する意義もその部分にある。

研究終了後の展望

将来的に、レクチャーパフォーマンスとその翻訳についての研究会をstudio21で開きたい。研究会は、ダンスの実践を取り入れることで、理論を実践し、また実践を理論化する場として機能させていく（研究会自体が、一つのレクチャーパフォーマンス化するイメージである）
また、同じレクチャーパフォーマンスを、違う言語で行った場合どうなるかの実験も視野に入れている。今回の研究が、のちの研究会へ繋がることでより発展し、将来海外作品を上演、もしくは日本語作品を海外で上演する際の参考になればと考える。

研究代表者：Yuni Hong Charpe（ユニ・ホン・シャープ）
東京生まれ。アーティスト。フランスと日本で制作を行う。